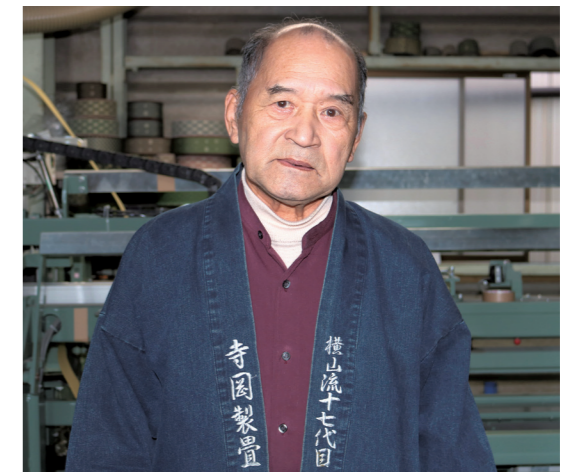


高い技術で手掛ける 高品質の畳

寺岡製畳



横山流十七代目 寺岡 常吉氏



福山市東深津町の寺岡製畳は1912（大正元）年創業としているが、実際は福山城の築城時まで遡るという。初代は福山藩祖・水野勝成公のお抱え畳師で横山流という流派を名乗った。現当主の寺岡常吉さんはその十七代目になる。住宅はもちろん、寺社や茶室まで全国から舞い込む注文を手掛ける。熟練の技で畳を縫い上げるが、い草の生産農家から直接仕入れることで破格の安価を実現している。生活様式の変化で畳に親しむ機会が減っているが、日本の風土に合った敷物である畳の伝統を守り続ける。

福山藩代々のお抱え畳師

寺岡さんが十七代目となる横山流は代々、福山藩から縁をもらい、お城に畳を納入してきた。寺岡さんの父の富夫さんは54歳の時に福山城湯殿に畳を納入したが、昨年の福山城築城400年に伴う改修事業に当たり、寺岡さんがその畳の修繕を行ったという。

明治維新後は寺院を中心に、やがて一般の住宅にも畳を納入するようになり現在に至っている。水野家の菩提寺・賢忠寺（福山市寺町）の境内に自宅や作業場があったが、1945（昭和20）

年の福山空襲で一面焼け野原に。母親はすでに疎開していたが、当時小学二年生だった寺岡さんは父と共に家を守るためそのまま残っていたという。当時職人を7、8人抱えていたが、終戦直後に焼け落ちた寺院や住宅を再建するため畳の需要は多かったという。

寺岡さんは中学生の頃から配達など家の手伝いを始めた。高校卒業後、就職も決まっていたが「代々畳をやってきたのだから」と父の後を継ぐことを決めた。

高品質で低価格を実現

東深津町に移転したのは1989（平成元）年のこと。作業所には所狭しと畳製造に特化した機械が並ぶ。手縫いが主流だった業界にあって、近辺のエリアでいち早く機械化に踏み切った。「メーカーに特注したオーダーメイドの機械」と寺岡さん。コンピューターにデータを打ち込むと正確に工程を進める。もともと機械化が進んだとはいえ、手縫いでなければならぬ部分も少なくない。

その代表的なものが寺院用の厚畳「礼盤」だ。今や手掛けている業者がほとんど無く、寺岡製畳には全国の寺院から注文が舞い込む。寺岡さんは「一枚作るのも大変」と話す。オール手作業で完成まで一週間は要するという。

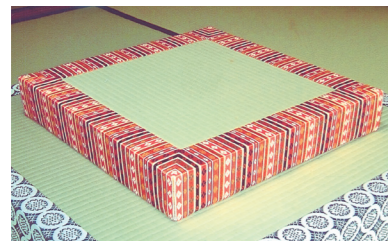
礼盤の縁を彩る畳縁で、最も格調が高い「縹網縁（うんげんべり）」も手掛ける。「全国の畳屋さんが受けるすべての量よりも、うちの方が量の多い年もある」とか。

高い技術で手掛けた高品質の畳にも関わらず、その価格は破格の安値。しかも配送も多くの場合無料で行っている。「昔から良い物を安く販売している。そうでなければ長く続けられない」というが、それを実現できるのは熊本のか草農家から原料を一括で直接買い取っているからだ。

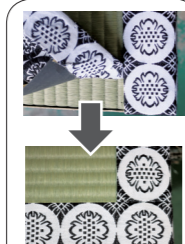
十八・十九代目に引き継ぐ

生活様式の変化で畳に親しむ機会が減っている。それでも寺岡さんは「畳は日本の風土に合った敷物」と強調する。夏は涼しく、冬は暖かい保温性に優れ、柔らかくてクッション性能があるため安全だ。湿度の調整ができ、吸音性もあるので畳があると静かな環境が整う。「畳にはたくさん利点がある」。

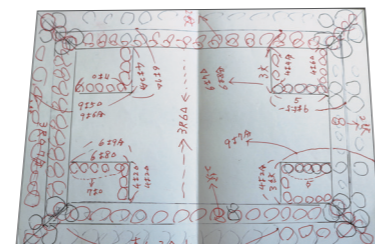
寺岡製畳には毎年、地元の深津小学校の二年生児童が工場見学に訪れる。「機械が動くところを



▲縹網縁の注文数は日本一



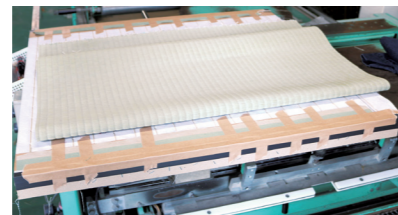
▲礼盤の縁の紋をきちんと出すため、手縫いにこだわる



▲手書きの設計図を元に製造



▲明治8年に撮影された福山城の複写。かつてお抱え畳師として城内に居住



▲畳製造の機械化が進む



▲縁なし琉球風畳



寺岡製畳

- 所在地 福山市東深津町二丁目16-31
- TEL (084) 931-0426
- FAX (084) 921-3563
- ホームページ [寺岡製畳](#) で検索

見せると、すごく喜んでくれる」とか。子どもたちから送られてくる礼状が何よりの励みになる。畳の伝統を絶やさないためにも、次世代にその良さを伝えるのも大事と考えている。

一方で、40年ほど前に業者と共同で、い草でなく和紙を原材料にした畳表の開発も行った。い草の畳に比べて色味が楽しめるほか、耐久性に優れた長年使っても変色しにくいという。「今では、い草よりも和紙の方が多くいる」とか。

すでに一級技能士の資格を持つ長男の晋治さんが後継者の道を歩んでいる。三人の孫も畳づくりに関心があるようで、横山流は十八・十九代目に引き継がれていきそうだ。

日曜も祝日も仕事に追われることが少なくないが、時間があるとキャリア75年になるという魚釣り「寺岡の畳でないといけない」という方もいらっしゃる。昔のものを寺岡流で、少しずつ現代流に作りやすく直しています。この熱意がある限り、伝統の灯が絶えることはない。

（取材・文 ビジネス情報 塩田 聡）